

「正体見たり」 創世記 45：1～8

I 導入部

おはようございます。7月第三日曜日を迎えました。今日も愛する皆さんと共に礼拝をささげることのできる恵みを感謝致します。毎日、暑い日が続いておりますが、皆さんはいかがお過ごしでしょうか。外に出れば、日差しが強く、何もしなくても汗ばんで、体力を消耗します。大雨で被害に遭われて避難生活をしておられる方々は、クラーのない体育館での生活に疲れが溜まっておられるようです。この暑い中、復興のために労しておられる自衛隊の方々、役所の方々、警察の方々、ボランティアの方々は、頑張っておられます。被災者の方々が守られ、一日も早い日常の生活に戻られるように、必要が満たされるように、健康と心が守られますように、復興のために労しておられる方々の健康が守られ、復興が進みますように、私たちは真剣に祈り、私たちのできる精一杯のことをしていきたいと思うのです。

今日は、創世記45章1節から8節を通して、「**正体見たり**」という題でお話ししたいと思います。

テレビドラマでも、映画でもヒーローの正体が暴かれる、犯人の正体が暴かれるということの中には、ハラハラドキドキの思いがあります。クライマックスの瞬間です。今日の箇所は、ヨセフ物語のクライマックスのシーンです。

II 本論部

一、人生いろいろ

ヨセフは、給仕役の長に2年間忘れられてしまいましたが、2年後エジプト王ファラオの見た夢を解いて、エジプトで王に次ぐ者、総理大臣になります。一日にして、囚人から総理大臣になったのです。7年間の大豊作の後に、大飢饉がやって来ました。ヨセフは、大豊作の時に、穀物を備蓄しました。ですから、大飢饉が来てもエジプトには穀物が備えられていました。エジプトの全国に飢饉が広がり、穀物のなくなった民は、ヨセフの元に行き、穀物を買いました。イスラエルにいたヤコブは、穀物がなくなり、エジプトに穀物があると聞いて、ヨセフの10人の兄たちに、穀物を買に行かせたのです。

10人の兄たちは、エジプトに来てヨセフの前にひれ伏しました。かつて、ヨセフの見た夢が現実となったのでした。ヨセフは兄たちに厳しい態度を取り、回し者で、この国の手薄な所を探りに来たのだと言いました。話の中で、12人兄弟がいて、末の弟は父の元にいると言います。ヨセフは、末の弟を連れてきたら、信用しようと言います。シメオン

を残し、9人は穀物を買ってヤコブの元に帰り、事の次第を告げます。末の弟のベニヤミンを連れて行くことを進言するとヤコブは、それだけではできないと言います。

買って来た穀物がなくなるとまた穀物を買に行かなければなりません。その時には、ベニヤミンを連れて行かなければならないのです。ヤコブが渋るとユダが、ベニヤミンを連れて行かなければ穀物を買に行くことはできません。ユダは必ずベニヤミンを連れ帰ります。もしそうできなければ、自分が罪を負い続けますと自分の思いと決心を告げヤコブはベニヤミンを送り出します。

ベニヤミンを連れて来た兄たちは、ヨセフの前にひれ伏すとヨセフは、そこに自分の弟ベニヤミンがいることに気が付きます。そして、自分の屋敷に連れて行くようにと執事に命令しました。兄たちとベニヤミンはヨセフの屋敷に連れて行かれてヨセフに会います。

ヨセフは、ベニヤミンの袋の中に、銀の盃を入れて置き、彼らの帰途の途中に追いかけ、主人の盃を盗んだ者がいると疑いをかけます。そして、一番年上のルベンから初めて袋を調べた結果、最後のベニヤミンの袋の中に入っていたのです。そして、全員がヨセフの屋敷に戻るようになったのです。

ユダは、ヨセフの前で、「**神が僕どもの罪を暴かれたのです。**」と言いました。そして、全員が奴隷になると言いますが、ヨセフは、盃を見つけられたベニヤミンだけが奴隷になり、他の者は父の元に帰るようにと告げます。しかし、ユダは、ベニヤミンは父にとっては大切な存在で、ベニヤミンを連れて帰らないと父を苦しめることとなります。ですから、代わりに私を奴隷として残して、ベニヤミンは帰れるようにしてほしいと自分の命を懸けるのです。このユダの命懸けの訴えにヨセフは心動かされるのです。自分をエジプトに売った兄たちとは違うものをそこに見たのです。ヨセフ自身もエジプトで多くの苦労を経験し、悲しい事、苦しい事を多く経験した。また、兄たちも自分たちがヨセフにしたことを反省し、悔い改めて、生きて来たことを知らされるのです。

二、事の始まりは人ではなく神様です

ヨセフは、エジプトの総理大臣として平静を装うことができなくなり、エジプト人を皆追い払いました。そして、ヨセフは兄弟たちの前で、実は、自分はヨセフであることを明かしたのです。正体を明かしたのです。そして、大声で泣いたのです。

3節です。「**わたしはヨセフです。お父さんはまだ生きておられますか。**」とヨセフは語り掛けました。兄弟たちは、驚きのあまり答えることができなかった、とあります。よくドラマや映画でも、生き別れになった親子や兄弟が出会うというシーンがあります。涙、涙のシーンです。兄たちは、まさか目の前にいる大国エジプトの総理大臣が兄弟のヨセフであるとは夢にも思いませんでした。夢でも驚きました。でも、夢ではないので、もっと驚いたのでしょう。声も出なかった。恐れに縛られたと言ってもいいのでしょう。

4節でヨセフは言います。「**わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。**」こう言われると、自分たちがかつてしたことを思い起こさせます。今だに覚えているのか、ということです。ヨセフがエジプトの総理大臣になり、自分たちを罰することができる存

在になっているので、恐れたことでしょう。今、裁かれても仕方のないことです。しかし、ヨセフは、5節で「しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちよりも先にお遣わしになったのです。」

ヨセフは、兄たちに憎まれました。うとまれました。そして、その憎しみのゆえにエジプトに売られた。エジプトでは奴隷として苦勞した。濡れ衣を着せられて監獄に入れられ、囚人にもなった。そして、監獄から出られるチャンスがあったけれども、忘れられた。しかし、神様は共におられ、自分をエジプトの総理大臣にまで導かれた。兄たちは、憎いからと言っても弟のヨセフを奴隷として売ってしまったこと、父を悲しめてしまったことを後悔していた。今ままで、そのことで心を痛めていた。心の重荷になっていた。しかし、ヨセフを売ったことを悔やんだり、誰が悪いと責め合ったりする必要はないと、きっぱりとヨセフは言ったのです。ヨセフが兄たちを恨んだことがないと言えば嘘になるでしょう。なぜ、兄たちは自分を奴隷としてエジプトに売ったのかと思ったこともあるでしょう。エジプトにさえ、奴隷として売られなければ、誘惑されることもなく、濡れ衣を着せられることもなく、監獄に囚人として入れられることもなかったのです。

事の始まりは、兄たちのせいだと思えなくもない。けれども、全ては神様の御計画であったとヨセフははっきりと理解しているのです。信じているのです。自分がエジプトの総理大臣になることで、自分と家族の命を救うために、神様の計画なされたことだとヨセフは確信しているのです。だから、逆から考えて、総理大臣になるためには、ファラオの夢を解く必要があった。ファラオの夢を解くためには、2年間給仕役の長に忘れられる必要があった。給仕役の長の夢を解くためには、ヨセフが監獄に入れられる必要があった。監獄に入るためには罪を犯す必要があった。ヨセフは罪を犯さないで、濡れ衣を着せられて間違っても罪人として監獄に入る必要があった。ポティファルの妻の誘惑がなかったら、濡れ衣を着せられることもなかった。ポティファルに買い取られなければ、誘惑にも会わなかった。エジプトに売られなければ、ポティファルに仕えることもなかった。兄たちが、ヨセフに憎しみをもち、エジプトに売ることがなかったら、ヨセフはエジプトの総理大臣にはならなかったのです。そして、家族の命を守ることもできなかったのです。すべては神様なのです。神様の計らいなのです。私達も、ヨセフがそうであったように、自分の人生のすべては神様が確かに導いておられることを確信したいと思うのです。

三、全ての事の背後に神がおられる

「しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちよりも先にお遣わしになったのです。」とヨセフは兄たちに語りました。私達も苦しい事や悲しい事を経験し、絶望することがあります。あの人のせいだとか、あの人の一言がとか、その人の言動によって、不幸を経験したり、嫌な事を体験したと思えることがあります。でも、神様は止めようと思えば、と止めるのです。守られるのです。全能の力を持って阻止できるのです。それを許された

ということの中には、神様の深い思い。み心が必ずあるのです。ですから、私たちも自分が経験した苦しい事や悲しい事を、人の何かのせいにするのではなく、ヨセフのように神様です、と神様に目を向け、人を責めるのではなく、神様を信頼したいと思うのです。

7節を共に読みましょう。「神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのは、この国にあなたたちの残りの者を与え、あなたたちを生き永らえさせて、大いなる救いに至らせるためです。」これから5年間も大飢饉がある。神様はそう示されたのです。だから、神様は、ヨセフをエジプトの総理大臣にまでして、家族の命を守ろうとされるのです。

ヨセフが経験した一つひとつの事は、良い事も、悪い事も、困難も祝福も、成功も失敗も、こんな事と思われることさえも、全ての事が神様の導きであったのです。ヨセフはそれを理解し、神様の導きを信じ、辛い経験も悲しい経験も痛い経験も、全てが神様のご配慮に満ちた出来事であったことを確信しているのです。

ですから、8節で「わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です。神がわたしをファラオの顧問、宮廷全体の主、エジプト全国を治める者としてくださったのです。」と兄たちに語ったのです。リビングバイブルには、「そうです。決して兄さんたちのせいではありません。神様のお導きです。神様は私を王の顧問にし、この国の総理大臣にしてくださいました。」とあります。お兄さんたちではないのです。神様なのです。

私たちは、自分の信仰生活の何かの問題を誰かのせいに行っていることはないでしょうか。その結果、その人との関係が崩れたり、壊れたりしていることはないでしょうか。それは、神様のお心ではありません。時間がかかっても、その人のせいではない事を確信し、主の導きを覚え、主のみ心がどこにあるのかを祈り求めることができたと思うのです。

神様は、ご自身が最も嫌われる罪を持つ私たちを愛して下さいました。そして、その罪を解決するために、私たちを罰するのではなくて、私たちを十字架につけるのではなくて、神であるお方、神の独り子であるお方、罪のないお方を十字架の上で罰し、私たちの罪の身代わりとされることにより、私たちの罪を赦し、魂を救われました。そして、イエス様が十字架に死んで、墓に葬られ、三日目によみがえることにより、私たちに永遠の命、天国への道を開いて下さり、死んでも生きる道を備えて下さったのです。そのことを感謝したいと思うのです。

Ⅲ 結論部

私たちの正体、それは罪人です。どのように表面を装い、笑顔を作っても私たちの心は罪で満ちているのです。その正体を知りながらも、私たちは、神様にそのままで愛されているのです。イエス様の正体、それは救い主です。神であるお方ですが、罪のないお方なのに、私たちの身代わりに十字架にかかり、私たちの身代わりで尊い血を流し、命をささげて下さり、私たちの罪を赦して下さいました。イエス様の正体、神様の正体は愛です。究極の愛です。この究極の愛で私たちを愛されるイエス様と共に、この週も共に歩んでまいりましょう。